



Title	1906年総選挙と自由党の再生：20世紀初頭の補欠選挙と1906年総選挙における対決の構図
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2006, 30, p. 1-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1906年総選挙と自由党の再生

—20世紀初頭の補欠選挙と1906年総選挙における対決の構図—

岡 田 新

I 歴史的審判

1906年総選挙は、イギリス政治史上時代を画する選挙であった。1886年の分裂以来低迷に喘いできた自由党は、400議席に届く地滑り的な大勝利を記録した。この自由党の勝利は、続くキャンベル・バナマン (Campbell-Bannerman) とアスクィス (Asquith) 政権による社会改革の実験を支え、1910年の二度の総選挙でクライマックスに達する貴族院の拒否権をめぐる憲政危機の導火線となる。1906年総選挙は、有権者の審判が、大英帝国の進路を変えためざましい実例の一つであった。⁽¹⁾⁽²⁾

では19世紀末に衰弱死すら囁かれていた自由党に、大勝利をもたらしたものは何だったのか。研究者が等しく指摘するのは、自由貿易の是非という明快な争点である。1903年、ジョゼフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain) が、閣僚の座を投げ打って帝国特恵関税 (Imperial Preferences) の導入を訴える関税改革キャンペーンに乗り出したことがその引き金となった。

もと自由党の急進改革派として名を馳せたチェンバレンは、1885年には、アイルランド自治問題でグラッドストーン (William Gladstone) と袂を分かち、自由統一党 (Liberal Unionist) を創設して自由党を分裂させた。1895年には、チェンバレンは、植民相としてソールズベリー卿 (Lord Salisbury) の内閣に加わり、保守党と合流、ソールズベリーの後を襲ったバルフォア (Arthur

Balfour) の下でも内閣に席を占めた。チェンバレンの創った自由統一党は、やがて保守党と一括りに統一党 (Unionist) と呼ばれるようになる。1903年、そのチェンバレンが、今度は大英帝国の国外からの輸入品に高い関税を課す帝国特恵関税を創設し、国内産業を保護する関税改革を提唱し始める。ドイツやアメリカ製品の競争に晒されたバーミンガムの金属工業の経営者であったチェンバレンにとって、帝国特恵関税は、イギリスの産業を保護すると同時に、労働者の福祉のための財源を捻出する社会改革でもあった。

チェンバレンの関税改革キャンペーンは、イギリスの政界を震撼させた。1846年の穀物法撤廃以来、自由貿易は、プロテスタンントの王位継承と並ぶ国是に等しい地位を占めていた。かつて保護貿易派の領袖であったディズレイリ (Disraeli) が首相に就任した時も、自由貿易の根幹には一指も触れることができなかった。チェンバレンは、敢えてこのタブーに正面から挑んだのである。1903年5月15日、チェンバレンは地元バーミンガムの演説で、帝国特恵関税の支持を表明し闇いの火蓋をきった。9月にはバルフォア内閣の閣僚を辞任、10月には全国的な関税改革のキャンペーンを開始し、帝国関税委員会 (Imperial Tariff Commission) や帝国関税同盟 (Tariff Reform League) が設立された。これに対抗して、保守党内部の自由貿易派 (Unionist Free Traders) も同志を糾合し、12月に自由貿易連盟 (Free Trade Union) を設立。双方の陣営のキャンペーンは熱を帯び、抗争の渦は各地の保守党組織に広がっていった。

だがチェンバレンに従う政治家は限られていた。バルフォアは、自由貿易に従わない国に対して報復関税を設定することを口にした。しかし帝国特恵関税には同調しなかった。保守党からは、チャーチル (Winston Churchill) のように、自由貿易を守るために自由党に鞍替えする政治家まで現れた。関税改革派と自由貿易派両派の対立の狭間で動きがとれなくなったバルフォアは、1905年12月4日、ついに政権を投げ出した。バルフォアは、自由党がアイルランド自治問題をめぐって收拾できない混乱に陥ることを期待した。だが自由党党首キャンベル・バナマンは、アスクィス (Asquith) ら自由帝国主義派 (Liberal Imperialists) を主要閣僚に登用して組閣に成功、12月16日には議会を

解散、翌年1月、総選挙を断行した。

チェンバレンの挑戦に自由党は結束を固めた。自由党の内部は、帝国主義に傾斜しボーア戦争に賛成したアスクリスら自由帝国主義派と、ボーア戦争に反対したロイド・ジョージ (Lloyd George) ら親ボーア派 (Pro-Boar) に二分されていた。しかし遠いアフリカの地の戦争をめぐって罵り合っていた両派は、自由貿易を脅かす挑戦を眼前に、轡を並べて自由貿易のもたらす「安いパン」の恩恵を訴え始めた。半世紀以上前、保守党の分裂を犠牲にして自由貿易に賭け、穀物法撤廃に踏み切ったピール (Peel) の情熱が、再び蘇ったかにみえた。

選挙戦の焦点は、チェンバレンが火をつけた関税改革か自由貿易か、という問題にあった。自由党候補の多くは、老齢年金の実現など社会福祉も争点に取り上げた。非国教徒の多いウェールズでは、ウェールズ国教会の非国教会化 (Disestablishment) も演説の主題となった。さらに自由党党首キャンベル・バナマンは、南アフリカの中国人労働者の惨状を、保守党攻撃の材料とした。しかし自由党候補は、自由貿易擁護の旗を高く掲げ続けた。バルフォアは、報復関税は自由貿易に反するものではない、というぎこちない弁明で攻撃をそらし、アイルランド自治問題で自由党の足並みを乱そうと試みた。だがキャンベル・バナマンは、次の議会ではアイルランド自治法案は取り上げないと宣言して、巧みに批判をかわした。

こうして自由貿易の是非が、1906年総選挙の抜き差しならない最大の争点となった。その結果、瀕死の自由党は息を吹き返し、20年にわたって遠ざかっていた多数派の奪還に成功した。1906年総選挙における自由党の勝利は、自由貿易の勝利に他ならない。これが1906年総選挙についての伝統的な解釈であった。

しかしピーター・クラーク (Peter Clarke) の研究以来、20世紀初頭の自由党の劇的な復活の背後に、より構造的な要因があることを指摘する研究があらわれた。クラークによれば、19世紀末から20世紀初頭にかけて、それまで

投票行動を決定する上で主要な役割を果たしていた宗教に代わって、階級利益が投票行動の主要な決定要因として立ち現れた。1906年総選挙における自由党の再生は、自由貿易の擁護という古い自由主義の復活であるばかりではない。それは、積極的な社会政策を通じて経済的な利益の実現を期待する労働者階級の支持が自由党に集まった結果でもあった。自由党と労働者は、20世紀初頭に密接な協力関係を打ち立て、「革新主義同盟」(Progressive alliance)ともいるべき政治ブロックを形成し、重大な政治変革を成し遂げる主体となつた。これがクラークの打ち出した見方である。⁽³⁾

1906年総選挙についての包括的な研究を著したラッセル (A.K.Russell) も、おおむねこうしたクラークのテーゼを支持した。ラッセルによれば、自由貿易が1906年の自由党の勝利にとって「中心的な重要性」を持っていたことは、「ほとんど疑いをいれない」。加えて自由党は、バルフォアの制定した教育法が国教会の宗教教育を援助するものだと憤る非国教徒や、アイルランド自治を渴望するアイルランド移民の支持も集めていた。だから統一党が選挙で敗北することは確実だった。だが自由党が400議席という大勝利を手にしたのは、予想を超える「労働者票」が自由党に投じられたためだった、とラッセルは言う。⁽⁴⁾

クラークらの見解は、激しい論争を引き起こした。論争の争点は多岐にわたっている。だが1906年総選挙について言えば、その焦点は、自由党の勝因が自由貿易という政策的争点にあったのか、それとも社会政策の実現を期待する労働者の支持にあったのか、という点にあった。関税改革キャンペーンに抗して自由貿易を擁護すること。それが、自由党に勝利をもたらしたのか。そうだとすれば、関税改革が政治の表舞台から消えた時、自由党の優勢は雲散霧消する運命にあったであろう。それとも自由党の復活の背後には、社会政策の実現を期待する労働者階級の支持があったのか。然りとすれば、自由党の再生は、1906年総選挙の争点を越えた長期にわたる恒久的な政治変動の一齣であったはずである。

歴史の行程は、20世紀初頭の自由党の復活が、一時的なものに終わらなかつ

たことを示している。4年後の1910年に行われた二度にわたる総選挙で、自由党は1906年の大勝利の議席数こそ維持することはできなかった。だがこの二度の総選挙で、人民予算を支持する自由党と労働党は、保守党・自由統一党を退けて多数を握り、貴族院の拒否権を葬り去った。クラークらの仮説が広く支持された理由の一つは、自由党の劇的な復活が憲法上の変革をもたらした、という歴史的事実の持つ重みであった。

しかし労働者が1906年総選挙で自由党を支持したことが事実であったとしても、両者の同盟は、果たしてどのような性格のものであったのか。両者はどれほど緊密だったのか。労働者と自由党は、何を目指して手を結び、両者の絆は何であったのか。こうした点に踏み込むと、必ずしも明瞭な解答は与えられていない。

20世紀初頭に投票行動の基盤が宗教から階級へ転換した、というクラークの仮説についても、ラッセルの研究は十分な論拠を提示しているとは言い難い。むしろラッセルは、自由党と労働者の間に鋭い緊張関係があったことを率直に記録している。自由党は、労働者の多い選挙区ではリブ・ラブと呼ばれる労働者候補を擁立した。だがそれ以外の選挙区では、自由党の立てた候補は、伝統的な地主や実業家、弁護士で占められ、労働党との候補者調整は難航した。自由党幹事長ハーバート・グラッドストーン (Herbert Gladstone) は、保守勢力に対する統一戦線を維持するため、労働党マクドナルドらとの交渉に精魂を傾けた。しかし、しばしば交渉は不調に終わり、少なからぬ選挙区で自由党と労働党が相食む結果となった。⁽⁵⁾

もし労働者と自由党が水も漏らさぬ堅牢な同盟関係を結んでいれば、候補者調整はこれほど困難でなかったであろう。労働党が伸長する余地も乏しかつたに違いない。労働党と自由党は協定を結んで選挙を戦った。このことは確かに両者が保守勢力に対抗する共同戦線を形作ったことを物語る。しかしハーバート・グラッドストーンとマクドナルドの間で結ばれたこの協定は、あくまでも非公式の秘密の協定であった。この事は、自由党と労働党、自由党と労働者の間に、協力関係を公然と結ぶことができない深刻な緊張関係が伏在

していたことを表している。労働党は保守勢力と対抗するため、場合に応じて、独自候補をとりさげて自由党候補に投票した。とはいっても、それは労働者が自由党に全幅の信頼を寄せ、独立した政治勢力を形成する意志を失ってしまったことを意味するものでは決してなかった。⁶⁾

従って20世紀初頭の労働者と自由党との関係を明らかにするためには、労働者が自由党に投票したというにとどまらず、さらに踏み込んで、どのような場合にどの程度、労働者が自由党を支持したかを分析し、自由党と労働者の緊張を孕んだ協力関係のあり方を具体的に究明することが求められる。自由党と労働者は、どこで踵を接し、どこで踵を分かったか。選挙の実態に即して、両者の政治的葛藤と協調を解明することが必要である。このためには、選挙区における政党の対決の様相を分析の枠組みの中に組み込んで、各政党の議席と得票の変動を分析し、ラッセルの研究をさらに一步掘り下げねばならない。1906年総選挙を、労働者と自由党の複雑な協力関係が展開していくプロセスの一つの契機として捉え、その実像を明らかにしてゆくことによって、初めて自由貿易という政策的な争点と、社会政策を期待する労働者階級の支持という構造的要因が、どのように絡み合って、この緊張を孕んだ協力関係に結実していったかをより明瞭に理解することができるであろう。

本稿では、こうした観点から、自由党と労働党、自由党と労働者の関係に焦点をあてて、1906年総選挙の選挙結果を分析したいと思う。ただし紙幅の関係から、本稿では、1906年総選挙にいたる補欠選挙の様相と、1906年総選挙での政党の対決の全体の構図を獲得議席のベースで分析するにとどめたい。各選挙区における政党の対決の様相と得票の変化についての分析は次稿にゆずることとしたい。

II 勝利への道—補欠選挙の趨勢

チェンバレンの関税改革キャンペーンが始まる前から、有権者の間には、保守政権への不満が鬱積し始めていた。1906年に至る補欠選挙の結果をみると

と、チェンバレンの関税改革キャンペーン前から燐っていた有権者の不満に、チェンバレンが火をつけたことが分かる。

1885年に自由党が分裂して以来、1892年から2年間の短い自由党政権をはさんだだけで、保守党と自由統一党は長期政権を続けていた。ソールズベリー首相は、1900年10月、ボア戦争の戦勝祝賀ムードの只中で「カーキ選挙」を仕掛け、1895年総選挙に続いて再び議会の多数を手にした。しかし世紀が転換し、1901年にヴィクトリア女王が世を去り、1902年にソールズベリーから甥バルフォアへと政権が引き継がれる頃から、労働者や非国教徒の間に、保守政権に対する怨嗟の声が広がり始めた。

労働者は、労働組合の争議権を根底から脅かされ、反撃の機会を窺っていた。1901年、タフ・ヴェール (Taff Vale) 鉄道会社を舞台にした争議について、ピケットを非合法とし、組合側に23,000ポンドの賠償を命じる判決が下された。この判決は、争議行為を支える労働組合の基金の存立そのものを脅かし、労働運動の息の根を止めかねないものであった。緊迫した事態に直面した労働組合の全国的結集体－労働組合会議 (Trade Union Congress) は、1905年、タフ・ヴェール判決を覆すべく、1900年に設立されていた労働代表委員会 (Labour Representation Committee) との間に支援協定を締結した。

一方自由党の伝統的支持基盤である非国教徒も、バルフォアの教育改革に憤懣を露わにしていた。1902年にバルフォアが提出した教育法は、中等教育における公教育を確立しようとした画期的な法律であった。だがこの法律は、破綻に瀕していた国教会の学校を税金で補助し救済することを意味した。このため非国教徒は、バルフォア教育法を税金で国教会を支援するものと非難し、激しい反対運動を展開した。なかんずく非国教徒が多いウェールズでは、地方税の支払いを拒否する事態へと発展した。この支払い拒否運動の先頭にたっていたのが、親ボア派の政治家として勇名を馳せたウェールズの政治家ロイド・ジョージであった。

1900年総選挙から1906年までの補欠選挙は、こうした政治的背景のもとで行われた。表1は、その結果を掲出したものである。これをみると、1900年

岡 田 新

総選挙後行われた補欠選挙で、自由党の議席が保守党ないし自由統一党に奪われた選挙は、わずか2例しかないことが分かる。

純粹に保守党に自由党が競り負けて議席を失ったのは、1902年10月22日のデヴォンポート (Devonport—2人区) 選挙区での補選だけであった。この選挙は自由党議員モートン (E. J. C. Morton) の死去に伴って行われた。鍔せり合いの末、保守党のロッキー (J. Lokie) が議席を奪った。ただ自由党は敗北したもの、自由党の新人ブラッシー (T. A. Brassey) の得票率は、先の選挙で自由党が得た得票率からわずかに1.3%低下した過ぎなかった。

1901年9月26日のラナークシャー (Lanarkshire) 北東選挙区補選でも、自由党は議席を失った。だがこれは、労働党が候補を擁立したために三つ巴の戦となつた選挙であった。この選挙区では、1900年総選挙においては、自由党と自由統一党が対決し、自由党候補が56.1%をとつて議席を得ていた。しかし1901年の補欠選挙では、自由党候補と自由統一党の候補の他に、スコットランド労働者代表委員会 (Scotland Workers Representative Committee) の候補が立つた。この結果、自由党の票がスコットランド労働者代表委員会の候補との間で割れ、自由党候補が落選し、自由統一党のラティガン (W. H. Ratigan) が漁夫の利を得て議席を獲得したのである。

だがこの2つの選挙以外の補欠選挙では、自由党が保守党・自由統一党に議席を失つた例は皆無だった。補欠選挙の結果を仔細に分析すると、1903年5月に関税改革問題が浮上する前から、保守党・自由統一党が、勢いを失いつつあったことが分かる。

例えば1902年11月18日-19日にわたつて行われたオークニーおよびシェトランド (Orkney and Shetland) 選挙区では、ワトソン (J. C. Watson) 議員が自由統一党を離党したことをきっかけに選挙が行われた。ワトソンが自由統一党を離れて無所属の自由主義者として立候補したのに対し、自由統一党と自由党が対立候補を立てた。その結果、ワトソンが46.8%を得票して再選を果たした。自由党新人候補は38.8%を集めたが、自由統一党の新人候補はわずかに14.4% (740票) しかとることができなかつた。ワトソンは次の総選挙から

自由党の公認候補となる。

またサセックスのライ (Rye) 選挙区では、1900年総選挙で、自由党は保守党に大差をつけられて落選していた。しかし1903年3月17日に行われた補欠選挙では、自由党候補ハチンソン (C. F. Hutchinson) は、18%も得票率を伸ばし、後がまを狙った保守党の新人を打ち破った。

議席を奪えない場合でも、自由党は1900年総選挙に比べて得票率を大きくかさ上げしている。最も顕著な例は、1902年8月21日に行われたケント州のセブンオークス (Sevenoaks) 選挙区であった。この補欠選挙では自由党候補モリス (B. Morice) は、落選はしたものの、1900年総選挙時に自由党候補リチャードソン (M. S. Richardson) が集めた得票率を24%も伸ばした。

関税改革が政治問題化するところから、自由党の勢いはさらに増した。セント・アンドリュー (St. Andrew District) 選挙区では、1900年総選挙で、自由統一党候補が自由党候補を54票差で破っていたが、1903年9月17日の補欠選挙では、自由党候補が36票差で自由統一党を競い破った。1904年に入ると、1月15日のノーフォーク州ナリッジ (Norwich) 選挙区、1月30日のエア (Ayr District) 選挙区、2月12日のハートフォードシャーのセント・オールバン (St. Albans) 選挙区、3月16日のドーセット (Dorset) 東選挙区、6月20日のデヴォンポート選挙区、7月26日のシロプシャーのオズウェストリー (Oswestry)、8月10日のラナークシャー北東の補欠選挙で、自由党は保守党ないし自由統一党から次々に議席を奪っている。

1905年に入ると、自由党の攻勢は止まることを知らない奔流となつた。1月17日のチェシャーのスタレイブリッジ (Stalybridge)、1月26日のドーセット (Dorset) 北、3月3日のビュート (Bute)、4月5日のブライトン (Brighton)、6月1日のヨークシャーのウイットビー (Whitby)、6月29日のフィンズベリー東、10月13日のヨークシャーのバーカストンアッシュ (Barkston Ash) で、自由党はいずれも議席を奪い取つた。

これらの選挙区では、自由党の得票率は大幅に上昇した。1904年3月のヨークシャーのノーマントン (Normanton) 選挙区で再選を果たした自由党候補は、

12%も得票率を伸ばし、1904年の7月26日のオズウェストリー選挙区でも、自由党候補は1901年の補欠選挙から9%も得票率をかさ上げし、1905年1月7日のスタレイブリッジでは、7.3%、6月29日のフィンズベリー(Finsbury)東では、14.2%、そして10月26日のハムステッド(Hampstead)でも自由党は最終的に競り負けたものの、11.9%も得票を伸ばし、得票率47.4%と議席にあと一歩まで詰め寄った。

自由党の得票率が大幅に上昇したフィンズベリー東は、ロンドンのシティの北に位置する「労働者地域」であり、⁽⁷⁾ ヨークシャーのノーマントンは、炭鉱労働者の選挙区であった。⁽⁸⁾ またチェシャーのスタレイブリッジも、紡績産業の地域に属して非国教徒の労働者人口を抱えていた。⁽⁹⁾ 一方ハムステッドはロンドン北西部の郊外に位置し、もともと保守党の地盤であるが、一部に労働者向けの住宅があり、1885年以来有権者が急増しそれとともに自由党の票が大幅に増えている。⁽¹⁰⁾ さらにシュロプシャーのオズウェストリーは、もともと保守党の強い選挙区で、自由党が議席を得たのは、この補欠選挙だけだったが、ウェールズ人の非国教徒が多い地域であった。⁽¹¹⁾

一方自由党が候補をたてなかつた選挙区では、労働党が議席を奪つた例もあつた。ウールリッジ(Woolwich)では、1892年以来、自由党のリブ・ラブ候補と保守党が争い、保守党が勝利してきた。しかし1903年3月11日の補欠選挙では、自由党は候補をたてず、労働党が単独で保守党と争い、61.4%を得て労働党候補が議席を獲得した。また1902年8月1日のランカシャーのクリザロー(Clitheroe)選挙区では、自由党議員が上院に転出したのに伴つて補欠選挙が行われたが、自由党は労働党の対抗馬をたてず、無投票で労働党が当選した。

しかし自由党と保守党に加えて労働党などから候補が立つ場合には、自由党は深刻な票割れの危機に直面した。1901年のラナークシャー北東選挙区で、三つ巴の争いの末、自由統一党が漁夫の利を得たことは先に見た。またダラムのバーナードキャッスル(Barnard Castle)では、1900年総選挙で、自由党と保守党が対決し、自由党が58.7%を得て勝利を収めていた。だが1903年7

月24日の補欠選挙では、労働党、自由党、保守党の三つ巴の闘いとなり、その結果、労働党のヘンダーソン (Henderson) が35.4%を集め、35%をとった保守党候補を47票差で下した。自由党候補は29.6%しかとれず、自由党はこの後この選挙区で候補をたてず、この選挙区は労働党の議席となる。

またヨークシャーのデューベリー (Dewsbury) では、1900年総選挙では自由党と保守党が対決し、自由党が60.8%で議席を確保した。だが1902年の1月28日の補欠選挙では、社会民主連盟 (SDF) が出馬して13.6%をとった。自由党候補はそれでも48.1%を集め、なんとか保守党 (得票率38.3%) を下したが、票を大きく減らすことになった。

さらに労働党の創設者ケア・ハーディーが1900年総選挙で出馬したプレストン (Preston—2人区) では、1900年の総選挙時には、保守党の二人の候補が労働党候補ケア・ハーディーを相手に、あわせて77.9%という圧倒的な票をとっていた。しかし1903年5月14日の補欠選挙では、保守党候補と労働党候補ホッジ (Hodge) の一騎打ちとなり、保守党は57.1%をとって議席を得たものの、労働党は42.9%を得票し、ハーディーの票を20%も伸ばして善戦した。その後1906年総選挙では、自由党と労働党の候補が一人ずつ立候補して、両者であわせて56.9%をとり、保守党2候補を破ることになる。

このように自由党は、関税改革が政治問題化する前から補欠選挙で攻勢を強めていた。そして関税改革キャンペーンが始まると、自由党の攻勢は一層勢いを増した。特に労働者の多い選挙区や非国教徒の影響の強い選挙区で大きく支持を集めようになっていた。しかし労働党から候補が立つと、労働党は自由党以上に大きく支持を集めることができた。三つ巴の争いになれば、自由党は大きく票を減らし議席を失う危険に直面しなければならなかつたのである。

岡田新

表1 1900年-1905年補欠選挙結果

	日付	選挙区	選挙前の議席	選挙の勝者	対立候補	自由党 前選挙 投票率	自由 党得 票率	増 減
1900	12/8	Dover	C	C	無投票			
	12/10	Surrey, Guildford	C	C	無投票			
	12/10	Suffolk, Woodbridge	C	C	無投票			
	12/10	Preston	C	C	無投票			
	12/10	Somerset, Wellington	C	C	無投票			
	12/11	Derbyshire, Western	LU	LU	無投票			
	12/21	Lancashire, Blackpool	C	C	L		44.2	
1901	2/26	Lancashire, Stretford	C	C	L	39.6	45	5.4
	3/1	Maidstone	L	L	C	50.4	52.1	1.7
	5/13	Essex, Saffron Walden	L	L	C	50.9	55.5	4.6
	5/7	Monmouth District	C	C	L	45.8	48.1	2.3
	5/24	Shropshire, Oswestry	C	C	L		43.2	
	6/25	Warwickshire, Stratford	C	C	L		38.5	
	7/12	Berkshire, Wokingham	C	C	無投票			
	8/26	Hampshire, Andover	C	C	L		48.4	
	9/26	Lanarkshire, North-Eastern	L	LU	L/SWRC		35.7	
1902	1/24	Hampstead	C	C	L		35.5	
	1/28	Dewsbury	L	L	C/SDF		48.1	
	2/3	Sheffield, Ecclesall	C	C	L	39	44.1	5.1
	3/25	Wakefield	LU	C	Lab			
	4/25	Woolwich	C	C	無投票			
	8/1	Lancashire, Clitheroe	L	Lab	無投票			
	8/15	Worcestershire, Eastern	LU	LU	無投票			
	8/14	Devon, Tiverton	C	C	無投票			
	8/21	Kent, Sevenoaks	C	C	L	21.3	45.4	24
	10/22	Devonport	L	C	L	51.1	49.8	-1.3
	11/5	Yorkshire, Cleveland	L	L	C		60.6	
	11/6	Liverpool, East Toxteth	C	C	L		47.2	
1903	11/18, 19	Orkney Shetland	LU	Ind L	L/LU			
	1/20	Liverpool, West Derby	C	C	L		37.3	
	2/26	Perthshire, eastern	L	L	無投票			
	3/11	Woolwich	C	Lab	C			
	3/17	Sussex, Rye	C	L	C	34.9	52.9	18
	3/26	Surrey, Chertsey	C	C	L	36.5	44.3	7.8
	4/8	Cornwall, Camborne	L	L	LU	55.4	50.9	-4.5
	5/14	Preston	C	C	Lab			
	7/24	Durham, Barnard Castle	L	Lab	C/L			
	9/17	St Andrews District	LU	L	LU	48.8	50.7	1.9
	9/23	Rochester	C	C	L		44.2	
	10/23	Warwick and Leamington	LU	LU	L	41.2	48.2	7
	10/24	Lancashire, Westhoughton	C	C	無投票			
	10/28	Hampshire, Fareham	C	C	無投票			
	11/4	Lancashire, Chorley	C	C	L		43.5	
	12/15	Camberwell, Dulwich	C	C	L		43	
	12/15	Lewisham	C	C	L		42.5	
	12/22	Shropshire, Ludlow	LU	LU	L		43.8	

1906年総選挙と自由党の再生

1904	1/7	Devon, Ashburton	L	L	C	54.7	58.6	3.9
	1/15	Norwich	C	L	C/Lab		48.3	
	1/20	Gateshead	L	L(Lab)	LU	53.8	54	0.2
	1/30	Ayr District	C	L	C	44.7	50.3	5.6
	2/12	Hertfordshire, At Albans	C	L	C		50.7	
	2/26	Birmingham, South	LU	LU	L		29.6	
	2/27	City of London	C	C	無投票			
	3/1	Yorkshire, Normanton	L(Lab)	L(Lab)	C	58.2	70.2	12
	3/15	Lancashire, Rossendale	L	L	無投票			
	3/16	Dorset, Eastern	C	L	C	49.5	53.7	4.2
	6/17	Leicestershire, Harbough	L	L	C	55	56.2	1.2
	6/20	Devonport (1902補選)	C	L	L	49.8	54.6	4.8
	7/2	Yorkshire, Sowby	L	L	C	57.6	60.9	3.3
	7/6	Surrey, Chetsey(1903補選)	C	C	L	44.3	47.3	4.0
	7/26	Shropshire, Oswestry(1901補選)	C	L	C	43.2	52.2	9.0
	8/6	Reading	L	L	C	51.3	51.2	-0.1
	8/10	Lanarkshire, North East(1901補選)	LU	L	C/SWRC	35.7	39.3	4.3
	10/7	Kent, Isle of Thanet	C	C	L		47.5	
	11/3	Monmouthshire, Western	L	L(Lab)	Ind C	71.3	70.4	-1.1
	11/11	Sussex, Horsham	C	C	L		45.1	
1905	1/12	Tower Hamlets, Mile End	C	LU	L	34.4	49.1	14.7
	1/7	Slaybridge	C	L	C	49.4	56.7	7.3
	1/26	Dorset, Northern	C	L	C	46.1	56	9.9
	2/22	Liverpool, Everton	C	C	L		39.8	
	3/2	Westmorland, Appleby	L	L	C	55.7	52	-3.7
	3/3	Bute	C	L	LU	45.7	50.6	4.9
	4/5	Brighton	C	L	C		52.6	
	6/2	Sussex, Chichester	C	C	L		47.4	
	6/1	Yorkshire, Whitby	C	L	C		52.6	
	6/29	Finsbury, East	C	L	C	45.7	59.9	14.2
	7/3	Staffordshire, Kingswinford	C	C	L		47.1	
	7/14	Carlisle	L	L	C		58.3	
	10/26	Hampstead(1902補選)	C	C	L	35.5	47.4	11.9
	10/13	Yorkshire, Barkston Ash	C	L	C		51.3	
	11/27	Yorkshire, Normanton	L(Lab)	L(Lab)				
	12/6	Hampshire, New Forest	C	C	L		48.9	

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より作成。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区および2人区。アイルランドは掲外。
- (3) C は保守党、LU は自由統一党（両者は選挙協力）、L は自由党、Lab は労働党、L (Lab) は自由党の労働者候補、Ind は無所属候補、SWRC はスコットランド労働代表委員会を指す。
- (4) 「自由党直前選挙得票率」は、直前選挙での自由党得票率を示し、1900年総選挙または直前の補欠選挙での自由党の得票率を示す。ただし直前選挙が無投票か、あるいは立候補の組み合わせが異なって比較できない場合は空欄のまま。「自由党得票率」は、当該の補欠選挙での自由党の得票率。「増減」は両者の差異を示す。
- (5) 網掛けは、議席を占める党派が変わったことを表す。
- (6) 選挙区に（補選）とあるのは、それ以前にこの期間中にあった補欠選挙を示す。

III 1906年総選挙における対決の構図

(1) 無投票当選

次に1906年総選挙における政党の対決の構図を、獲得議席を基礎として、直前の総選挙—1900年総選挙と比較しながら観察してみよう。別稿で指摘したように、1886年の分裂以来、自由党の候補者数は大きく落ち込み、このことが保守党候補者の無投票当選を許す要因の一つとなっていた。しかし1906年総選挙では、自由党は単独でも保守党・自由統一党をあわせた総数と匹敵する候補者を擁立した。選挙協定を結んでいた労働党の候補者をあわせると、自由党と労働党の候補者数は、保守党・自由統一党をあわせた候補者数を40人以上凌駕している。自由党と労働党は、1906年には守勢から攻勢に転じ、保守勢力を凌ぐ数の候補者を擁立して総選挙を戦った。この結果、無投票当選の様相は一変したのである。

表2から分かるように、1906年総選挙での自由統一党の候補者数は1900年総選挙に比べて10人減っているものの、保守党の立候補者数は、ほとんど変わらなかった。これに対し自由党は、1906年総選挙で立候補者を1900年総選挙から126人も増やした。労働党も15人から49人へと3倍以上に立候補者を増やした。

自由党・労働党が多数の候補者を擁立したため、無投票当選は激減した。19世紀末の保守党の優勢は、無投票当選によるところが大きかった。1900年総選挙でも、無投票当選はイングランド、ウェールズ、スコットランドの567議席（1人区517議席、2人区50議席）の内、実に172議席（全議席中30.3%）を占めていた。この1900年総選挙における無投票当選者のうち87.2%にあたる150議席は、保守党・自由統一党の当選者だった。ところが1906年総選挙では、表3に掲出したように、無投票当選者は、全体でわずか32議席（全議席中5.6%）に縮小する。相当数の議席が無投票のままだった従来の選挙とは違って、1906年総選挙は、全体の95%近くの議席が、実際に複数の候補によつ

て争奪される激しい選挙戦となったのである。

しかも1906年総選挙の無投票当選者の中で、保守党・自由統一党の当選者は、5議席（全議席中15.6%）に過ぎなかった。一方自由党の側は、1906年総選挙の無投票当選者は、27議席にのぼり、1906年総選挙の無投票当選者の84.3%を占めた。つまり1900年総選挙までは保守党・自由統一党が無投票当選者の圧倒的多数をしめていたのに対し、1906年総選挙では、無投票当選者が激減しただけでなく、無投票当選者の圧倒的多数が、自由党となった。1900年には、無投票で150議席も稼いでいた保守党と自由統一党は、1906年には、無投票当選ではわずかに5議席しか手に入れられなかった。無投票当選の状況は一変し、当選者の色分けも180度転換したのであった。

無投票だった選挙区の状況を立ち入って観察すると、1906年総選挙では、1895年以来10年にわたって保守党・自由統一党が無投票当選を享受してきた選挙区のうち108の選挙区で、自由党や自由貿易派が対抗馬を立て、保守勢力の無投票当選を阻止した。こうした選挙区の中には、1886年以来20年にわたって保守党が無投票を続けてきた11の選挙区も含まれていた。

例えばケンブリッジ大学選挙区は、第三次選挙法改正後の1885年総選挙から一貫して保守党の無投票が続いてきた。しかし1906年総選挙では、このケンブリッジ大学選挙区でも、保守党前議員ゴースト (Gorst) が自由貿易派に鞍替えして立候補し、落選はしたものの、保守党候補ブッチャー (Butcher)、ローリンソン (Rawlinson) と議席を争った。またアバディーン・グラスゴウ大学選挙区でも、1906年総選挙では、保守党が議席を守り抜いたとはいえ、第三次選挙法改正後初めて、保守党候補クレイク (Craik) に対して自由党と自由貿易派が対立候補をたてた。

保守党・自由統一党は、1906年総選挙では、それまで金城湯池であった無投票当選をすっかり失ってしまったのであった。

岡田新

表2 1900年、1906年総選挙立候補者数

政党	1900年	1906年	増減
保守党	445	447	+2
自由統一党	94	84	-10
自由党	401	527	+126
労働党	15	49	+34
自由貿易派		5	+5
その他	10	36	+26
計	965	1148	+183

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区および2人区。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む。

表3 1900年、1906年総選挙党派別無投票当選者

選挙区	政党	1900年	1906年	増減
1人区	保守党	116	2	-114
	自由統一党	23	1	-22
	自由党	21	27	+6
2人区	保守党	10	1	-9
	自由統一党	1	1	0
	自由党	1	0	-1
計		172	32	-140

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区および2人区の当選者数。アイルランドは掲出外。
- (3) 掲出しているのは、当選者の数。

(2) 1人区

自由党と保守党・自由統一党は多くの1人区で激突し、自由党が議席を次々に奪つていった。しかし労働党の逞しい前進にも瞠目すべきものがあった。

1900年総選挙と1906年総選挙では、政党の対決の様相が大きく変貌した。

表4、表5は、アイルランドを除いたイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区における政党の対決を、保守党ないし自由統一党と自由党の対決、保守党ないし自由統一党と労働党との対決、保守党、自由党、労働党ないし、自由統一党、自由党、労働党の三つ巴、無投票、その他のパターンに分けて分類したものである。

まず無投票当選が減った分、保守党（自由統一党）と自由党・労働党との一騎打ちの対決が大幅に増えたことが分かる。表4に明らかなように、1906年総選挙では、1人区での保守党（自由統一党）と自由党との一騎打ちが、前の選挙での341選挙区から418選挙区へと77選挙区も増加した。だが保守党（自由統一党）と労働党の対決は、さらに大幅に増えた。1人区での保守党（自由統一党）と労働党との一騎打ちは、1900年には4議席だったが、1906年総選挙では19議席と5倍近く激増している。

1人区の選挙結果をさらに詳細に分析してみることにしよう。表5は、1人区における政党の対決パターンごとの獲得議席数を掲出したものである。1906年総選挙で、保守党、自由統一党の無投票当選が激減したことはすでに触れた。だが1900年総選挙においては、保守党と自由党の一騎打ち選挙区でも、保守党が優勢であったのに対し、1906年総選挙では、保守勢力との一騎打ちも自由党の圧勝に終わっている。

具体的には、1900年総選挙では、保守党ないし自由統一党と自由党とが一騎打ちした341選挙区のうち、保守党ないし自由統一党は197議席（議席占有率57.8%）を獲得した。一方1906年総選挙では、同じカテゴリーの418選挙区で、保守党ないし自由統一党が議席を獲得したのはわずか108議席（当該議席中25.8%）に過ぎなかった。1906年総選挙では、保守党・自由統一党と自由

党とが対決した418議席のうち、310議席（当該議席中74.2%）で自由党が勝利を収めたのである。

しかしさらに興味深いのは、1906年総選挙で、自由党が立候補せずに労働党と保守党との一騎打ちとなつた選挙区で、労働党が圧倒的な議席を得たことである。1900年には、保守党ないし自由統一党と労働党が対決した4選挙区は、保守勢力の完勝に終わった。ところが、1906年総選挙では、保守党ないし自由統一党と労働党が対決した19選挙区のうち、労働党は14議席（当該議席中73.7%）を獲得し、大躍進を遂げたのである。

具体的には、1900年総選挙では、ロンドンのタワー・ハムレット (Tower Hamlets)、ロンドン郊外のウエストハム南、北部イングランドのブラッドフォード (Bradford)、マンチェスター南西選挙区で、保守党と労働党が対決した。労働党は、ブラッドフォードではわずか41票差で惜敗し、ウエストハム (Westham) 南では得票率44.2%と善戦したものの、タワー・ハムレット、マンチェスター南西では得票が4割に届かず、結局4選挙区とも敗退した。

1906年総選挙では、保守党・自由統一党と労働党との一騎打ちとなつた選挙区は4選挙区から一挙に19選挙区に増えたが、そのうち、バーミンガムのボーズレイ (Bordesley)、バーミンガム北、ダーリントン (Darlington)、リバプールのカーケデール、リバプールのウエスト・トクステス (West Toxteth) の5つの選挙区では、労働党はやはり議席に届かなかつた。ただしバーミンガム北では得票率47.4%、ダーリントンでは48.3%、カーケデールでは45.7%、ウエスト・トクステスでは43.5%をとり、議席に肉薄した。

しかし労働党は、ウールリッジ (Woolwich)、バロー・イン・ファーネス (Barrow-in-Furness)、チャタム (Chatam)、リーズ東、マンチェスター北東、ランカシャーのゴートン (Gorton)、ランカシャーのウエスト・ヒュートン (Westhoughton) では6割以上の票を集め、ランカシャーのインス (Ince) では70.2%をとり、マンチェスター南西でも58.5%、セントヘレン (St. Helen) でも56.6%とかなりの票差をつけて保守党を叩き落して議席を手に入れた。さらにウォルヴァーハンプトン (Wolverhampton) 西では、171票差、ランカ

シャーのニュートン (Newton) では541票差で競り勝った。

加えて前回総選挙に引き続いで保守一労働の対決となったウエストハム南では、今回労働党が23.0%も得票を伸ばし、5,237票もの差をつけて当選。またダラムのバーナド・キャッスル (Barnard Castle) では、1900年総選挙では、自由党と保守の対決で自由党が勝ち、1903年7月の補欠選挙では、保守、労働、自由の三つ巴戦でからくも労働党が議席を制したが、1906年総選挙では、保守党と労働党の一騎打ちで、労働党が58.8%をとって議席を維持した。

さらに注目すべきは、保守党、自由党、労働党の三つ巴の闘いの結果である。1900年総選挙では、三つ巴戦となった3選挙区は、すべて保守党ないし自由統一党の勝利に終わっていた。ところが1906年総選挙では、三つ巴戦となった選挙区は3から15に激増したが、保守党ないし自由統一党が勝利したのはこのうち7議席 (当該議席47%) にとどまり、自由党と労働党がそれぞれ5議席 (当該議席33.3%)、3議席 (当該議席20%) を手にして健闘した。

具体的な状況をみると、1900年総選挙では、三つ巴となった選挙区のうち、ロッチデールでは自由党が45.9%、労働党が8.0%、アシュトン・アンダー・ライン (Ashton-under-Lyne) の3選挙区では、自由党が35.9%、労働党が11.0%、リーズ東では自由党が25.2%、労働党が20.1%をとったが、いずれも保守党に議席をさらわれていた。ただしロッチデールの場合には、自由党と労働党が協力すれば確実に当選できることは明らかであり、アシュトン・アンダー・ラインとリーズ東の場合も、両党が協力すれば議席を狙える地位を得られると思われた。事実アシュトン・アンダー・ラインでは、1906年には労働党が候補をたてず、自由党と保守党の一騎打ちとなり、自由党が56.3%をとって議席を奪い、リーズ東では1906年には自由党が候補をたてずに労働党と保守党の一騎打ちとなって、労働党が66.1%を集めて議席をとった。またロッチデールでは1906年には、労働者の無所属候補が立ったものの、労働党が候補を立てなかつたため、自由党が議席を得た。

一方1906年総選挙で三つ巴となった15選挙区のうち7選挙区は、保守勢力の勝利に終わったものの、保守陣営は自由党と労働党の2人の候補の間で票

が割れたことで助けられた。自由党と労働党の候補の得票を合わせても42.4%に過ぎなかつたのはグライブセンド (Gravesend) だけで、クロイドン (Croydon) では、1906年には自由統一党のアーノルド・フォスター (Arnold-Foster) が41.5%をとつて当選したが、次点の自由党のサマーセット (Somerset) と三位の労働党のストランクス (Stranks) をあわせると、得票率は58.5%に達していた。またストックトン・オン・ティー (Stockton on Tee) においても、保守党のローパナー (Ropner) は45.5%を集めて1906年総選挙の勝者となつたが、自由党と労働党の候補の合計は54.5%に及び、ウェークフィールド (Wakefield) でも、当選した保守党ブラザートン (Brotherton) は、実は40.8%しか得票できず、自由党と労働党は、合計すれば59.2%を得票しており、グレート・グリムズビイ (Great Grimsby) でも、自由統一党のダワティ (Doughty) は、50.2%の得票率で議席を獲得したが、2位と3位の自由党と労働党候補の票を合わせれば49.8%に達し、自由統一党は、自由党と労働党の合計よりわずか61票多く集められたに過ぎなかつた。スコットランドのラナークシャーのゴバン (Govan) でも、保守党のダンカン (Duncan) は、35.9%を集めたが、自由党のマレイ (Marray) とは128票差の辛勝であり、労働党のヒル (Hill) の集めた29.0%の票が自由党に入れば勝敗は明らかであった。グラスゴウのカムラキー (Camlachie) にいたつては、自由統一党、自由党、労働党は、それぞれ36.5%、33.5%、30.0%を得票し横一線に並んでおり、自由党と労働党が争わなければ、自由統一党のクロス (Cross) が議席を手にすることは望むべくもなかつた。

1906年の三つ巴戦15選挙区のうち5選挙区では、自由党はなんとか議席を制したものの、労働党の立候補で自由党はしばしば苦境に陥つた。リーズ南では、労働党候補が32.6%を集めたが、自由党はわずか1%得票を低下させただけで逃げ切つた。ランカシャーのエクレス (Eccles) では、労働党が出馬して26.4%を集めたため、自由党が得票率を49.1%から38.8%に大きく落としたが、かろうじて、595票差で自由党が保守党から議席を奪い取るのに成功した。さらにウェールズのモンマスでも、労働党が16.5%をとつたが、自由

党は45.8%から44.7%に得票率をわずかに下げたにとどまり、保守党が54.2%から38.8%へ大幅に得票を減らしたために、議席を保守からもぎとった。またデューズベリー (Dewsbury) では、自由党は議席を維持したものの、労働党候補がでて21.3%をとったため、1900年総選挙の得票率60.8%から54.7%に票を減らした。ハダースフィールド (Huddersfield) でも、自由党はからくも議席を保ったが、労働党が出馬し35.2%もの票を集めため、得票率を38.2%に低下させ、労働党候補と489票差に詰め寄られてしまった。

そして1906年総選挙の三つ巴戦のうち、デプトフォード (Deptford)、ブラッドフォード西とグラスゴーのブラックフライア・アンド・ハチソンタウン (Balckfriar and Huchesontown) の3選挙区では、三つ巴戦を労働党が制した。デプトフォードでは、1900年総選挙では、自由党は労働者の候補 (Lib-lab) をたてて37.7%をとっていたが、1906年には労働党候補が出馬して52.2%という大量の票をとる一方、対抗した自由党候補はわずか6.1%しか集められなかつた。ブラッドフォード西では、1900年には保守と労働の対決で、労働党候補は49.8%をとつて惜敗していた。1906年総選挙では、自由党候補が出馬し28.2%をとつたため、労働党の得票率は39.1%にまで低下した。にもかかわらず、保守党候補の得票率が50.2%から32.7%にまで大幅に下落したために、労働党は810票差で議席を維持した。さらにグラスゴーのブラックフライアでは、1900年総選挙では、保守—自由の対決で自由党は43.2%を集めていた。だが1906年総選挙では出馬した労働党のバーンズ (Barnes) が一気に39.5%の大量の票を集め、35.8%を集めた保守党候補を310票差でふりきつて議席を制した。自由党候補は24.7%にまで大きく得票率を低下させた。

表4 1900年、1906年総選挙1人区における政党対決

政党対決の類型	1900年	1906年	増 減
保守党(自由統一党)対自由党	341	418	+77
保守党(自由統一党)対労働党	4	19	+14
自由党対労働党	1	1	0
保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	3	15	+12
無投票	160	30	-130
その他	8	34	+26
計	517	517	

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの選挙区。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属 (Independent)、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む。

1906年総選挙と自由党の再生

表5 1900年、1906年総選挙1人区における政党対決と党派別獲得議席

政党対決の類型	政党	1900年	1906年	増減
保守党(自由統一党)対自由党	保守党(自由統一党)	197	108	-89
	自由党	144	310	+166
保守党(自由統一党)対労働党	保守党(自由統一党)	4	5	+1
	労働党	0	14	+14
自由党対労働党	自由党	1	1	0
	労働党	0	0	0
保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	保守党(自由統一党)	3	7	+4
	自由党	0	5	+5
	労働党	0	3	+3
無投票	保守党(自由統一党)	139	3	-136
	自由党	21	27	+6
	労働党	0	0	0
	その他	0	0	0
その他	保守党(自由統一党)	4	10	+6
	自由党	2	20	+18
	労働党	0	1	+1
	その他	2	3	+1
計	保守党(自由統一党)	347	133	-214
	自由党	168	363	+195
	労働党	0	18	+18
	その他	2	3	+1

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの選挙区。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属 (Independent)、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む。

(3) 2人区

2人区では自由党と労働党との協力は、目覚しい成果をあげたが、労働党は自由党と争って議席を得る力をもつようになりつつあった。表6で掲出しているように、2人区でも無投票当選は激減した。1900年に12議席あった無投票は、1906年には2議席しかなかった。かわりに三つ巴の闘いが激増した。保守党（自由統一党）と自由党の一騎打ちは、1900年総選挙での22議席（11選挙区）から16議席に減少し、4議席あった保守党（自由統一党）と労働党との一騎打ちは1906年には無くなかった。一方三つ巴戦は8議席から22議席へと3倍近くに増え、2人区25選挙区50議席のうち、11選挙区22議席（2人区全体の44%）が三つ巴の戦いとなった。

保守党ないし自由統一党と自由党が対決した場合、1900年総選挙では、保守党・自由統一党が22議席中14議席（当該議席中63.6%）を獲得した。ところが1906年総選挙では、保守勢力は16議席中2議席（当該議席中12.5%）しか取ることができなかった。自由党は1900年総選挙では、このカテゴリーでは22議席中8議席（当該議席中36.7%）しか取れなかつたが、1906年には16議席中14議席（当該議席中87.5%）を獲得し、文句なく圧勝した。6年間で保守党・自由統一党と自由党の党勢は完全に逆転したことが分かる。

注目に値するのは、保守党ないし自由統一党と労働党が対決した場合、そして三つ巴戦の選挙結果である。まず1900年総選挙では、保守党ないし自由統一党と労働党が対決した場合、4議席すべて保守党候補が勝利した。具体的には、1900年総選挙では、ランカシャーのブラックバーン（Blackburn—2人区）で、保守党候補2人に対し、労働党候補スノーデン（Snowden）が挑んだが、25.6%しかとれずに涙をのんだ。また補欠選挙のところでも触れる機会があったが、プレストン（2人区）では、1900年には保守候補2人に労働党のハーディーが挑んだが、これも22.1%しかとれずに敗退した。

ところが両選挙区とも、1906年総選挙では、労働党と自由党が1人ずつ候補をたてて協力し、議席の獲得に成功した。ブラックバーンでは、1906年に

は、保守2人に労働党1人、自由党1人が挑み、労働党スノーデンは26.7%をとり、23.3%にとどまったく2人目の保守党候補ドレイジ (Draig) を抑えて議席を得た。プレストンでも、1906年総選挙では、保守党候補2人に対し、労働党1人、自由党1人が挑戦し、労働党のマクファーソン (Macpherson) が30.9%、自由党のコックス (Cox) が26.0%を獲得して、保守党を下した。

1906年選挙では、保守党ないし自由統一党と労働党が直接対決する選挙区はなくなったが、興味深い結果となったのは、保守党ないし自由統一党、自由党、労働党の三つ巴となった選挙区である。このカテゴリーの議席は、1900年には8議席であったが、1906年には22議席と3倍近くに増加した。そして、1900年には保守党ないし自由統一党が8議席中4議席（当該議席中50%）を確保したのに対し、労働党はわずか1議席をとったに過ぎなかった。ところが、1906年総選挙では、保守党ないし自由統一党は22議席中2議席（当該議席中9.1%）しかとれず、自由党は22議席中10議席（当該議席中45.5%）を確保し、労働党も一挙に22議席中10議席（当該議席中45.5%）を手にしたのである。

具体的にみると、1900年総選挙では、ダービー（2人区）では、保守党2人に対し、自由党と労働党が1人ずつ立候補し、それぞれ26.6%と25.7%をとって議席を分け合った。1906年総選挙でもダービーでは、自由党と労働党が1人ずつ候補を出して議席を分け合った。一方サンダーランド (Sunderland 2人区) では、1900年総選挙で、自由党と労働党が候補を1人ずつ出して、保守党2候補と大接戦を演じた。保守党の2人の候補がそれぞれ25.7%、25.6%を集めたのに対し、自由党候補は25.1%、労働党の候補は23.6%を集め、保守党2位のペンバートン (Pemberton) と自由党のハンター (Hunter) の票差はわずか196票であった。1906年総選挙では、やはり自由党と労働党が候補を1人ずつに絞った結果、自由党が32.2%、労働党が31.9%を集めて、保守党の候補者に大差をつけて議席を得た。

一方ハリファックス（2人区）では、1900年総選挙では自由統一党候補1人に対して、自由党候補が2人、労働党から1人が立候補し、その結果、自

由統一党と自由党が1人ずつ当選する結果となった。自由統一党の得票率は29.6%、自由党の2人の候補の得票率がそれぞれ27.6%と26.5%であったのに対し、労働党候補が集めた得票は16.3%であった。この得票からみれば、労働党が単独で議席を得る可能性は乏しいが、自由党と労働党が候補を調整すれば両党とも議席を取れる可能性があることは明らかであった。レスター(2人区)でも、1900年総選挙では、保守党候補1人に対し、自由党候補2人、労働党候補1人が立ち、その結果、自由党1人、保守党1人が当選した。この場合も、保守党候補の得票率は28.2%であり、次点の自由党候補は26.5%、労働党のマクドナルドは13.0%であったから、やはり労働党単独では議席には遠く手が届かないものの、労働党が票を集めれば自由党は苦しく、自由党と労働党が協力できれば、保守党を議席から引きずり下ろすことが可能であることは明確であった。

事実1906年総選挙では、ハリファックスでは、自由党と労働党が候補を1人ずつに絞り込んで、自由統一党に打ち勝って議席を分け合い、レスターでも同様に、1906年総選挙では自由党と労働党が候補を1人ずつ絞り込んで、保守党2候補を破った。

他方先にも見たように、1900年総選挙で保守党と労働党が対決したブラックバーンとプレストンでは、1906年総選挙では、自由党と労働党が候補を1人ずつ出した。ブラックバーンでは結局、保守党のホーンビー(Hornby)と労働党のスノーデンが当選し、プレストンでも自由党と労働党の候補が、保守党の候補2人を破って議席を制した。

ニューカッスルとストックポートでは、1900年には自由党と保守党が対決していたが、1906年総選挙では労働党が争いに加わった。ニューカッスルの場合、1900年総選挙では保守党候補2人と自由党候補2人がぶつかり、自由党候補はそれぞれ20.7%と20.6%の得票率にとどまっていた。しかし1906年総選挙では、自由党候補はケアンズ(Cairns)1人に絞られ、労働党候補ハドソン(Hudson)が立候補した。その結果、自由党は30.5%、労働党はそれを上回る31.1%を集め、保守党を議席から突き落とした。

1906年総選挙と自由党の再生

ストックポートでも、1900年総選挙では、自由党2人と保守党2人が議席を争い、自由党1人、保守党1人が当選した。一位当選を果たした自由党のレイ (Leigh) の得票率は、26.5%だったが、3位で落選した自由党候補グリーン (Green) は、24.4%で、二位で当選した保守党メルヴィル (Melville) とは177票の僅差であった。しかし1906年総選挙では、労働党のワードル (Wardle) が立ち、自由党は候補をダックワース (Duckworth) 1人に絞り、その結果、労働党が32.4%、自由党が29.1%をとり、自由党は保守党3位のバーンストン (Barnston) に1953票の大差をつけて当選した。

1900年総選挙では無投票だった選挙区ボルトン、ナリッジの場合も、1906年総選挙では、自由党と労働党が1人ずつ立って議席を分け合った。ただしやはり1900年には無投票だったヨークの場合、1906年総選挙では、自由党1人と労働党1人が立候補し、自由党は27.7%をとて当選したが、労働党の方は19.7%にとどまり、落選した。

こうして2人区の多くでは、自由党と労働党が候補を1人ずつに絞って協力し、保守党を追い落として、自由党も労働党も大きく議席を伸ばすことに成功した。場合によっては労働党が自由党の得票をしのぐ票を集めようになっていた。しかしさらに注目に値する例として、ダンディーでは、自由党候補2人に労働党候補が加わった争いとなり、労働党が自由党を押しのけて2議席目を得る結果となった。ダンディーでは1900年総選挙では、自由党2人に保守党1人、自由統一党1人の候補が2議席を争い、自由党2人がそれぞれ30.2%、29.7%を集めて議席を制していた。ところが1906年総選挙では、労働党候補ウィルキー (Wilkie) がこれに割って入ったため、自由党のロバートソン (Robertson) は、31.7%を集めて議席を守ったものの、自由党2人の候補ロブソン (Robson) は、20.9%の得票にとどまり、労働党がそれを上回る23.3%を集めて2議席目を抑えたのである。

岡 田 新

表6 1900年、1906年総選挙2人区における政党対決

政党対決の類型	1900年	1906年	増減
保守党(自由統一党)対自由党	22	16	-6
保守党(自由統一党)対労働党	4	0	-4
自由党対労働党	2	2	0
保守党(自由統一党)・自由党・労働党	8	22	+14
無投票	12	2	-10
その他	2	8	+6
計	50	50	

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの議席数。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属 (Independent)、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む。

1906年総選挙と自由党の再生

表7 1900年、1906年総選挙2人区における政党対決と党派別獲得議席

政党対決の類型	政党	1900年	1906年	増減
保守党(自由統一党)対自由党	保守党(自由統一党)	14	2	-12
	自由党	8	14	+6
保守党(自由統一党)対労働党	保守党(自由統一党)	4	0	-4
	労働党	0	0	0
自由党対労働党	自由党	1	1	0
	労働党	1	1	0
保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	保守党(自由統一党)	4	2	-2
	自由党	3	10	+7
	労働党	1	10	+9
無投票	保守党(自由統一党)	11	2	-9
	自由党	1	0	-1
	労働党	0	0	0
その他	保守党(自由統一党)	2	2	0
	自由党	0	6	+6
	労働党	0	0	0
計	保守党(自由統一党)	35	8	-27
	自由党	13	31	+18
	労働党	2	11	+9
	計	50	50	

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの議席数。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属 (Independent)、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む。

(4) 議席の変動

表8は、1人区の結果(表5)と2人区の結果(表7)の結果をまとめて、保守党(含む自由統一党)の獲得議席を、カテゴリー別に集計したものである。この表から明らかにように、保守党は自由党との一騎打ちで大きな敗北を喫した。また2人区における敗北も相当な比重を占めていた。その多くは労働党と自由党との協力によって議席から追い落とされたものであった。し

かし実は最も大きな損失は、無投票当選の激減によるものであったことが分かる。1906年選挙で保守党が大きく議席を減らした地域—ランカストリア、ロンドン、イングランド南東部は、まさにこの無投票当選が激減した地域であった。⁽¹²⁾

一方表9は、同じく1人区の結果（表5）と2人区の結果表7から、労働党の獲得議席を、カテゴリー別に集計したものである。労働党は、自由党と協力して保守党との一騎打ちで相当な議席を獲得した。2人区でも、労働党は自由党と議席をわけあう形で議席を得た。しかし表から明らかのように労働党は、1人区でも保守党と自由党を相手に争い、議席を制する実力を備えつつあったし、2人区でも自由党を上回る票を集め、三つ巴でも自由党を押しのけて議席を手にする力を示したのであった。

表8 政党対決の類型と保守党の獲得議席

選挙区	政党対決の類型	1900年	1906年	増減
1人区	保守党(自由統一党)対自由党	197	108	-89
	保守党(自由統一党)対労働党	4	5	+1
	保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	3	7	+4
	無投票	139	3	-136
	その他	4	10	+6
	計	347	133	-214
2人区	保守党(自由統一党)対自由党	14	2	-12
	保守党(自由統一党)対労働党	4	0	-4
	保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	4	2	-2
	無投票	11	2	-9
	その他	2	2	0
	計	35	8	-27

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの議席数。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属 (Independent)、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む

1906年総選挙と自由党の再生

表9 政党対決の類型と労働党の獲得議席

選挙区	政党対決の類型	1900年	1906年	増減
1人区	保守党(自由統一党)対労働党	0	14	+14
	自由党対労働党	0	0	0
	保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	0	3	+3
	無投票	0	0	0
	その他	0	1	+1
	計	0	18	+18
2人区	保守党(自由統一党)対労働党	0	0	0
	自由党対労働党	1	1	0
	保守党・(自由統一党)・自由党・労働党	1	10	+9
	無投票	0	0	0
	その他	0	0	0
	計	2	11	+9

注記

- (1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの議席数。アイルランドは掲出外。
- (3) 自由党には、労働者候補 (Lib/Lab) を含む。「その他」には、無所属 (Independent)、保守党系無所属、自由党系無所属、労働党系無所属、アイルランド国民党、スコットランド労働代表委員会、社会民主連盟の候補を含む

IV 結びにかえて

本稿は、1906年総選挙にいたる補欠選挙の状況と総選挙における政党対決の構図について、獲得議席を基礎として分析を試みたものである。紙幅の関係から、各選挙区における具体的な政党の対決と得票率の変動の詳細な分析は、次稿に譲ることにしたい。したがって、ここでは、限られた範囲で、分析の結果を簡潔にまとめておくにとどめたい。

1906年総選挙では、1903年に開始されたチェンバレンの関税改革キャンペーンを契機として政治問題として浮上した自由貿易問題が、最大の争点となつた。しかし補欠選挙の結果を仔細に観察すると、保守党と自由統一党の党勢

は、関税改革キャンペーン以前から衰退をみせ始めていた。自由党の勢いは、関税改革キャンペーン前から、労働者や非国教徒の多い選挙区で上げ潮に向かっていたが、労働党も自由党以上に力強い前進をみせ、無視できない存在となりつつあった。

1906年総選挙では、勢いをかった自由党、労働党が積極的に攻勢に転じ大量の候補者を擁立したため、保守党・自由統一党は、世紀末に享受してきた無投票当選を失って大打撃を受けた。1人区では保守党・自由統一党と自由党との一騎打ちが激増し、自由党の圧勝に終わった。2人区でも、自由党と労働党の協力で保守党は議席から叩き落された。しかし労働党は、単なる自由党の協力者にとどまらず、1人区の三つ巴戦でも議席を手にし、2人区でも自由党を得票で上回り、自由党を押しのけて議席を手にする力を示し始めていたのである。

こうした分析から見る限り、自由党と労働者、自由党と労働者の協力関係が、20世紀初頭に発展し、関税改革キャンペーンを契機に強化されていったことは、疑いをいれない。しかしそのプロセスは同時に、労働党の一方的な自由党への奉仕ではなく、両者の間の競合的な緊張をさらに高めてゆく過程でもあったと言わねばならない。労働党との協力が円滑に進まない場合、自由党は、労働党の後塵を拝する危険を冒さねばならない場合すら出現していたのである。

注記

- (1) 本稿は、第三次選挙法改正後のイギリスの選挙政治についての筆者の研究の一環をなしている。背景をなす研究状況と筆者の問題意識については「近代イギリス選挙史研究序説—第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動—」(『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国语大学、1997年所収) および「選挙の歴史学」(『世界地域学への招待』、嵯峨野書院、1998年所収) を参照。また1886年総選挙についての筆者の分析としては、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換」(『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国语大学、2000年3月所収) を、1892年、1895年、1900年総選挙の分析については「19世紀末における自由党

1906年総選挙と自由党の再生

の衰退」（『国際社会への多元的アプローチ』大阪外国语大学、2001年所収）と「自由党の衰退と反攻」『英米研究』（大阪外国语大学英米学会、2004年所収）を参照。なお最近のイギリスの現代史研究動向の一端については、「Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics* —各版の異同と改訂の意味」（EXORIENTE 大阪外国语大学言語社会学会 Vol. 9 2004年）で紹介している。

- (2) イギリスの選挙史上、野党が400議席に届く地滑り的な勝利を記録して政権を奪取した例は三回あった。1906年総選挙（自由党は184議席から400議席へ）1945年総選挙（労働党は154議席から393議席へ）、1997年総選挙（労働党は271議席から419議席へ）である。この選挙は、いずれも政治史上の大きな転換点となる。
- (3) Peter Clarke, *Lancashire and New Liberalism* (Cambridge, 1971) ただしクラークは、後の著作で、宗教の影響が20世紀にも大きいことを指摘し、このテーゼを修正しているように思われる。Peter Clarke, *Hope and Glory* (Penguin, 1996), p.160.
- (4) A. K. Russell, *Liberal Landslide* (David & Charles, 1973)
- (5) *Ibid.*, pp. 44-48.
- (6) 労働代表委員会の中には保守党に近いグループもあり、社会主義者は、マクドナルドが自由党のために労働者を裏切ることを警戒していたから、「協定は秘密でなければならなかった」。G. R. Seale, *A New England? Peace and War 1886-1918* (Oxford, 2004) p. 335参照。
- (7) Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* (Macmillan, 1967) pp. 48-49.
- (8) *Ibid.*, p. 304.
- (9) *Ibid.*, p. 256.
- (10) *Ibid.*, p. 33. ハムステッドの有権者は、1885年の5,981人から1905年1,1301人へ、1906年には11,467人へと膨れ上がっている。
- (11) *Ibid.*, p. 199.
- (12) 選挙結果の地域別の特性を分析する余裕はここではないが、念のため地域別に政党対決の類型を整理した表を掲出しておくことにしたい。

1900年の地域別対決パターン(1人区)

AREA	政党対決の類型						計
	CL	CLAB	CLLAB	LLAB	O	U	
BRISTOL	12					8	20
CEUTRAL	14					7	21
DEVON & CORNWALL	10					6	16
EAST ANGLIA	16					4	20
EAST MIDLAND	22					6	28
LANCASTRIA	39	1	2		2	22	66
LONDON	44	1			1	11	57
NORTH ENGLAND	23					6	29
PEAK-DON	9					3	12
SCOTLAND	63				2	3	68
SOUTH-EAST	20	1			1	31	53
UNIVERSITY						3	3
WALES	20			1		11	32
WESSEX	8					6	14
WEST MIDLAND	15					27	42
YORKSHIRE	26	1	1		2	6	36
総 計	341	4	3	1	8	160	517

1906年の地域別対決パターン(1人区)

AREA	政党対決の類型						総計
	CL	CLAB	CLLAB	LLAB	O	U	
BRISTOL	19						20
CEUTRAL	21						21
DEVON & CORNWALL	14				1	1	16
EAST ANGLIA	18				1	1	20
EAST MIDLAND	25		1		1	1	28
LANCASTRIA	47	10	1		7	1	66
LONDON	49	1	1		6		57
NORTH ENGLAND	16	2	1	1	3	6	29
PEAK-DON	10					2	12
SCOTLAND	56		3		8	1	68
SOUTH-EAST	47	2	2		2		53
UNIVERSITY	1				2		3
WALES	18		1		1	12	32
WESSEX	14						14
WEST MIDLAND	39	3					42
YORKSHIRE	24	1	5		2	4	36
総計	418	19	15	1	34	30	517

注記

(1) F. W. S. Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より作成。

1906年総選挙と自由党の再生

- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区および2人区。アイルランドは掲出外。
- (3) Cは保守党、LUは自由統一党（両者は選挙協力）、Lは自由党、Labは労働党、L（Lab）は自由党の労働者候補、Indは無所属候補、SWRCはスコットランド労働代表委員会を指す。
- (4) CLは保守党（含自由統一党）と自由党の対決、CLABは保守党（含自由統一党）と労働党の対決、CLLABは保守党（含自由統一党）、自由党、労働党の三つ巴、LLABは自由党と労働党の対決、Oはその他、Uは無投票を示す。